
異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

赤い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

【Nコード】

N1465Y

【作者名】

赤い人

【あらすじ】

とりあえず三人称で書いてみたいと思ったので書いて見ました。名前も失った少年がファンタジーワールドをどう生きていくかの物語です。

序章

少年は自分の状況をどうにか理解しようとした。昨日まで変わらなかった少年の寝室、昨日までであった普遍的な日常、そして昨日までであった少年の記憶……。何もかもが消え失せ、朝起きたらここは屋根裏部屋。フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに少年は寝ていた。外に出た先は一面の草原。向こうには山があるのみ。そう、少年は異世界に飛ばされていたのだ……！

限りなくファンタジーというジャンルがお似合いの世界。魔法が存在し、王政やらと少年の生きた世界とは常識が全く違うこの世界で、少年はどんな生き方をするのだろうか。

一話

先に言えば、まだ異世界に飛ばされる前の少年はかなり普通の日常を送っていた。普通に起き、普通の食事を食べ、普通に学校に行き、普通に友達がいて、普通に勉強して普通の家に帰って普通に寝て。

恐らく、これほどまでに薄っぺらい人生を送っている少年はいないだろう。その事を知ってしまったそいつは、彼に対してひどく同情でもしたのである。このまま、彼の人生を終わらせたくないと思ってしまったのである。だからそいつは、限りなく普通の日常とは程遠い所に移したのである。

ところで、そんな未知体験をした少年は、

「何処だここおおおお！！??」

普通の人ならば当然であろう叫び声を上げた。彼のような普通の日常を送っている人物ならば尚更だ。

「えっちよつとまって？ ここマジで何処？ 外見ればなんにも無い草原だし、ここだって俺の家じゃないし。てか俺だれー」

とそこで、少年はふと止まる。

自分は一体何者だと。

二話

「……」

少年は只々啞然としていた。以前、もとい昨日までの記憶がなかったのだ。なにも、真っ白に、少年は昨日までの記憶を思い出せなかった。自分が誰なのかだけではない。慕ってくれた友達、自分を産んでくれた両親、そして自分が住んでいた町の風景でさえ、彼の脳髄には一切の記憶がなかったのだ。そして少年にとって何より苦しかったのは、それを認識してしまう己だったのだ。

「……ひつく。おかあさん……」

ついに少年は涙を流し、やがて号泣し、もう顔さえも覚えていない母親の事を思い出そうとしていた。しかし、それは叶わなかったのだった……。

三話

ありったけ泣いた末、なんとか泣き止んだ少年は、ひとまず階段を降りて下の方を見てみた。するとそこには人はいなかったが、台所など少年がここで一人暮らしできそうなぐらいの設備があった。とりあえず少年はここで生活をする事を決意し、ここらにある物を漁ってみた。すると、

「……ええ」

刃渡り6cmほどある両方に刃がある両刃の刃物、つまり長剣を見つけた。そして実はかなりの武器マニアだった少年は、すぐにこの剣の名称を思い出す。

「なんでこんなところに＜ロングソード＞があるんだよ……」

少年は呆れながら言った。＜ロングソード＞とは長剣としては一般的な部類にはいる剣で、西洋では広く使われていた武器の一つだ。その他にも沢山ある。一つは木を鉄で補強した盾だったり、皮の鎧や皮の膝当てや皮でできたバンダナ、最後は皮の小手を見つけた。どうやらこの、少年が飛ばされた異世界はかなりファンタジーな世界であるらしかった。普通家に、このような武器や防具があるはずないのだから。あるとしてもそれは観賞用が普通だろう。しかし、今ここにすぐにでも使えそうな武具が普通に並べられているのが事実だったりする。

とりあえず武器防具を見た事も着た事もなかった少年は、とりあえずそこにあつた装備一式を着てみた。すると、

「あ、ピッタリだ……」

思いのほかあっさりと着れてしまっていた。大きすぎてぶかぶかでもないし、小さすぎて窮屈そうでもなかった。それを思わせないほど彼は着こなせていた。まるですでに何十年間も着ていたかのような馴染み深い感触のように……。

「……」

少年は<ロングソード>も握ってみた。やはりかなり馴染んでいた。しかしそれでも、剣術はからつきしただだからなのか（そもそも記憶がないのでそれを確かめようがないが）、振ってみてもあまり様になっていなかった。

「俺って、ここに住んでたのか？」

そうとしか考えられなかった。確かに見る物すべてはじめてだったが、この武具たちを着て馴染んでしまうのだから疑うのも仕方がない。だがしかし、考えてみればさっきの記憶を失ったことを認識していたことを思い出すと、

「……いや、やっぱりここは俺の住んでた場所じゃない」

少年はさっきのことが気になって仕方がなかった。そしてそれがこの結論を導いたのである。

とりあえず、今日一日、およびこの近くのことを書かれてある地図^{ツラ}を見つけるまでここで寝止まって、地図^{ツラ}みたいなものを見つけたらこの馴染んだ武具一式をもってここを立ち去ることを決めた少年だった。

四話

夜。既に空は暗くなり、月や星が照らす暗黒で美しい空となっていた。少年はひとまずカンテラに火をつけ、一階の部屋の辺りを明るくした。

この部屋を漁った結果、地図^{マップ}はおろか多種多様の道具、この世界での貨幣と思わしきコイン、金目の物品などなど、今後生活して行く上で必須とも言えるような物が沢山あった。また食料も豊富にあり、数日は食住には困りそうにない。しかしここは、ここで目覚めたいと言え他人の家。地図を見つけた以上ここに長居するつもりは少年にはなかった。万が一この家の者が現れた事を考えて、明日の朝にでも出発する気でいたのだ。その為に少年は道具入れ袋に長旅に必要な物をパンパンに入れた。

その前に、少年は地図を広げてこの世界の全体図を見た。有難い事に手書きなのか、この家を中心に書かれていた。

北方角 - 地図で言う所の真上の方角には、小さながら町があった。他方の方角には町と思われるような物はなかったのだ、ひとまず少年は明日この方角に行く事を決めた。

そうと言われればあとは睡眠のみ。少年はすぐ出発できるように荷物を屋根裏部屋まで持って行き、フカフカの藁にシーツを敷いただけのベットに横になって眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1465y/>

異世界に飛ばされて記憶をなくした少年の物語。

2011年11月4日14時03分発行